

令和 2 年 6 月 18 日現在

機関番号：12604
 研究種目：基盤研究(C) (一般)
 研究期間：2017～2019
 課題番号：17K04922
 研究課題名(和文) 知的発達障害者のライフステージに応じた生涯発達支援システムの構築に関する研究

 研究課題名(英文) Construction of life-long development support system according to life stage of people with intellectual developmental disabilities

 研究代表者
 菅野 敦 (KANNO, Atsushi)

 東京学芸大学・特別支援教育・教育臨床サポートセンター・教授

 研究者番号：10211187
 交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、実態調査を通して、知的障害者の生涯発達支援について、ライフステージ別の支援課題を明らかにし、さらに、支援プログラムの作成及び有効性の検証を行った。結果、知的障害者のライフステージが上がるにつれて、支援課題が変化していくこと、これらの課題に対しては、主に「学習」の領域を活動の軸として、その都度知的障害者本人が学び続けることのできるような支援体制が必要であること、生涯発達支援の4領域の土台になる「考えるわざ」へアプローチする必要性とその有効性などが明らかとなった。今後は外部機関との連携を含めたシステム構築の検討及び有効性の検証を行う必要がある。

研究成果の学術的意義や社会的意義

2018年の「障害者基本計画第4次」では、「学校卒業後の障害者が社会で自立して生きるために必要になる力を生涯にわたり維持・開発・伸長するため、効果的な学習や支援のあり方等に関する研究や成果普及等を行い、障害者の各ライフステージにおける学びを支援する」ことが改めて示された。このように、生涯にわたる発達支援である「生涯発達支援」が、近年改めて注目されていることが分かる。しかし、これまでライフステージに着目し、特に成人期における知的障害者に対する生涯発達を前提とした支援方法の検討はほとんどなされていないため、研究を積み重ねていく必要がある。

研究成果の概要(英文)：This research clarified about the lifelong development support of adults intellectually disabilities through the survey, the support task according to life stage, and the support program was prepared and the effectiveness was verified. As a result, (1) support issues will change as the life stage of adults with intellectual disabilities rises. (2) For these issues, Adults intellectual disability will be used in each case, mainly in the area of "learning" activities. It became clear that a support system that enables the individual to continue learning is necessary, and (3) the need to approach the "Way to think" that forms the basis of the four areas of lifelong development support and its effectiveness. In the future, it is necessary to study the system construction including cooperation with external organizations and verify the effectiveness.

研究分野：知的発達障害心理学

キーワード：知的発達障害 ライフステージ 生涯発達支援 支援プログラム 支援課題

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

2002年に2018年の「障害者基本計画第4次」では、「学校卒業後の障害者が社会で自立して生きるために必要になる力を生涯にわたり維持・開発・伸長するため、効果的な学習や支援のあり方等に関する研究や成果普及等を行い、障害者の各ライフステージにおける学びを支援する」ことが改めて示された。このように、生涯にわたる発達支援である「生涯発達支援」が、近年改めて注目されていることが分かる。

しかし、これまでライフステージに着目し、特に成人期における知的障害者に対する生涯発達を前提とした支援方法の検討はほとんどなされていないため、研究を積み重ねていく必要がある。

2. 研究の目的

本研究（「知的発達障害者のライフステージに応じた生涯発達支援システムの構築に関する研究」）は、近年注目されている知的発達支援について、ライフステージ別の支援課題に基づく支援プログラムの構築を目的とした研究である。具体的には4つの研究よりなる。

研究1では、知的発達障害者におけるライフステージ別の支援課題に関わる調査研究を行う。研究2では、知的発達障害者におけるライフステージ別の活動内容に関わる調査研究を行う。研究3では、知的発達障害者におけるライフステージ別の支援プログラムの作成を行う。研究4では、知的発達障害者におけるライフステージ別の支援プログラムの有効性の検証を行う。

3. 研究の方法

研究1： 調査対象：障害者相談支援事業所4159カ所であった。調査内容：知的発達障害者におけるライフステージ別の支援課題についてであった。調査方法：郵送による質問紙の送付、回収により行った。回収率：25.8%であった。分析：年代別に「学習・余暇支援」「自立生活支援」「作業・就労支援」「コミュニケーション支援」「健康支援」の5つの領域の回答率を算出した。

研究2： 調査対象：就労移行支援事業所2058カ所であった。調査内容：知的発達障害者におけるライフステージ別の活動内容についてであった。調査方法：郵送による質問紙の送付、回収により行った。回収率：24.1%であった。分析：年代別に「日常生活に関する活動」「学習活動に関する活動」「作業や就労に関する活動」「コミュニケーションに関する活動」「健康管理に関する活動」の5つの領域の回答率を算出した。

研究3： 調査対象：成人期知的障害者50名。調査内容：調査方法：研究1及び研究2の調査結果に基づいて、研究協力者とともに知的発達障害者におけるライフステージ別の実態に応じた支援プログラムの作成を行った。分析：「支援内容・支援方法」「職員配置」「評価表」に分けて検討した。

研究4： 調査対象：成人期知的障害者50名。調査内容：成人期知的障害者におけるライフステージ別の支援プログラムの試行。調査方法：研究協力者とともに知的発達障害者におけるライフステージ別の実態に応じた支援プログラムの作成を行った。分析：「支援内容・支援方法」「職員配置」「評価表」に分けて検討する。

4. 研究成果

研究1：、ライフステージ別の支援課題についての調査研究に取り組んだ。結果、学習・余暇支援領域では、「転学」に関する相談の6割が小学校段階で、「アセスメント」「学習の遅れ」「サービス利用」の相談も同様に多く見られた。中学校から高校段階では「不登校」の相談が多く見られた。成人期ではこの領域の相談件数は少ない結果であった。自立生活支援領域では、家族や経済の相談が継続し、ADLに関しては10代で獲得、2、30代で維持の問題に変化した。作業・就労支援では、高校卒業後に不満などを感じ相談に至るケースが多く、20歳代にはキャリアアップ、30代では転職希望などの支援要請の相談の割合が増加、40歳以上では辞意が多く見られた。「コミュニケーション支援領域」では、10代では友人や家族との間で、自身の障害特性を理解できないことなどから、他害をする等の相談が見られた。20代では友達や同僚、職員との間で、周囲の理解の不十分、環境変化の結果の対人トラブルも見られた。30代では、同僚や職員との間で、精神疾患、動作緩慢などによる関わり方の難しさがあった。40代以上は行動上の問題は減少するが、30代で見られた問題が継続した。「健康支援領域」では、10代までは、「精神面での不安定」「障害が受容できない」。20代では環境変化により「精神的・身体的な傷病」に発展、また「能力を発揮できない」場面も顕在化する。30代では安定するが、「加齢により発症する疾病」が現れ始める。40代以上になると、「退任期へと移行」「全身状況の老化」が見られた。

研究2：ライフステージ別の活動内容についての調査研究に取り組んだ。結果、「日常生活に関する活動」は20代、30代、50代に多く見られ（順に17.9%、19.4%、15.8%）、ライフステージに関係なく一貫して活動を提供していることが明らかとなった。「学習活動に関する活動」は10代、20代に多く見られ（順に15.3%、15.8%）、その後減少したことから、学齢期から成人期への移行期である10代、20代に多く提供されることが明らかとなった。「作業や就労に関する活動」は20代、30代、50代に多く見られ（順に26.3%、25.8%、31.6%）、ライフステージに関係なく一貫して活動を提供していることが明らかとなった。「コミュニケーションに関する活動」は20代、30代に多く見られ（順に、37.4%、35.5%）、職場での対人関係などのトラブ

ルへの対応のためにこのような活動を提供していることが予想された。「健康管理に関する活動」は10代、20代、30代に多く見られ(順に12.7%、14.2%、14.5%)、ライフステージに関係なく一貫して活動を提供していることが明らかとなった。

研究3: 研究協力者との協議を重ねた結果、研究1で明らかになった支援課題のうち、成人期以降の自立生活に関する内容や、転職・キャリアアップなどが特に問題として挙げられた。これらの問題に対して知的発達障害者自身が主体的に考えて解決していくために、4領域のベースとなる「考えるわざ」を学ぶことが必要であると考えられた。そのため、成人期以降の学習活動を主な活動として設定し、支援プログラムを作成することとした。支援内容として成人期を4つの期に分け、それぞれの期に学習する内容を整理した。その結果、主にコミュニケーション領域や学習・余暇領域の内容に取り組む「ヤングアダルトプログラム(23~30歳)」、作業・就労領域を中心としつつ自立生活領域やコミュニケーション領域の内容にも取り組む「ミドルアダルトプログラム(31~45歳)」、作業・就労領域を中心としつつ自立生活領域や学習・余暇領域の内容にも取り組む「シニアアダルトプログラム(46~55歳)」、主に自立生活領域や学習・余暇領域の内容に取り組む「オールドアダルトプログラム(56歳~)」というライフステージに応じた支援プログラムが提案された。

研究4: 研究3で提案された支援プログラムのうち、より多くのライフステージにまたがる学習内容となる自立生活領域の学習内容を取り上げた。さらに、東京学芸大学での「オープンカレッジ東京」の取り組みにおいて、講義内容や教材作成に関する研究協力者との議論を通して、「考えるわざ」を学習するプロセスを整理し、知的発達障害を有する受講生へ実際にそのプロセスに沿った学習活動を提供した。支援プログラムの検証としては毎回の学習活動を振り返り、受講生の正答率の上昇や保護者から収集した日常生活の変化に関する情報などから、効果的であったと言える。

今後の課題として、外部機関との連携を含めたシステム構築の検討及び有効性の検証を行う必要性が挙げられる。本研究では、実態調査の結果を踏まえながら研究協力者との協議を積み重ね、知的障害者に対して、定期的な支援プログラムの提供を行った。支援プログラムは一定の効果を得たものの、ライフステージに応じた支援プログラムの提供や外部機関との連携を含めた「システムの構築」には至らなかったため、今後は支援プログラム及び支援システムの構築や有効性の検証が必要である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計10件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 6件）

1. 著者名 今枝史雄・菅野敦	4. 巻 70
2. 論文標題 成人期知的障害者の自己決定の選択行為に関わる問題理解プロセス遂行の特徴（ ） - 観点の抽出に焦点をあてて -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 東京学芸大学紀要 総合教育科学系	6. 最初と最後の頁 167-176
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 今枝史雄・菅野敦	4. 巻 54
2. 論文標題 成人期知的障害者の生涯学習支援で取り組まれる学習内容と基礎的学習能力との関連	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 特殊教育学研究	6. 最初と最後の頁 145-155
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 菅野敦	4. 巻 71
2. 論文標題 学齢期から成人期のダウン症候群について - 理解と支援のポイント -	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 助産雑誌	6. 最初と最後の頁 839-844
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 今枝史雄・菅野敦	4. 巻 16
2. 論文標題 成人期知的障害者の問題解決に関わる知的機能の特徴 田中ビネー知能検査の項目の分析を通して	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 発達障害支援システム学研究	6. 最初と最後の頁 89-96
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 今枝史雄・菅野敦	4. 巻 69
2. 論文標題 成人期知的障害者の自己決定の選択行為に関わる問題理解プロセス遂行の特徴 - マトリックス表課題の実施を通して -	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 東京学芸大学紀要総合教育科学系	6. 最初と最後の頁 453-462
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 佐藤麗奈・今枝史雄・菅野敦	4. 巻 69
2. 論文標題 障害幼児の就学先決定に向けた支援体制に関する研究 - 教育委員会の運営する支援教室との関係から -	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 東京学芸大学紀要総合教育科学系	6. 最初と最後の頁 463-475
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 佐藤麗奈・今枝史雄・菅野敦	4. 巻 14
2. 論文標題 早期支援における児童発達支援施設と関係機関との連携に関する研究 - 経営主体別の比較を通して -	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 東京学芸大学教育実践研究支援センター紀要	6. 最初と最後の頁 99-108
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計60件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 近藤拓弥・今枝史雄・竹井卓也・菅野敦
2. 発表標題 成人期知的障害者の障害福祉サービスにおける一般就労へ向けた支援課題に関する研究 () - コミュニケーション領域に焦点を当てて -
3. 学会等名 日本発達障害学会第53回研究大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 今枝史雄・菅野敦
2. 発表標題 成人期知的障害者の選択行為に関わる問題理解プロセス遂行の特徴() - 「観点の命名」プロセスに焦点をあてて-
3. 学会等名 日本発達障害学会第53回研究大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 松本咲子・今枝史雄・菅野敦
2. 発表標題 成人期知的障害者における障害福祉サービスの役割に関する検討
3. 学会等名 日本発達障害学会第53回研究大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 松本咲子・今枝史雄・菅野敦
2. 発表標題 成人期知的障害者の就労継続支援事業における機能の検討
3. 学会等名 日本特殊教育学会第56回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 竹井卓也・小笠原拓・今枝史雄・菅野敦
2. 発表標題 知的障害者の自己決定の選択プロセスの遂行の特徴() 日常生活課題を題材とした実践を通して
3. 学会等名 日本特殊教育学会第56回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 今枝史雄・小笠原拓・竹井卓也・菅野敦
2. 発表標題 知的障害者の自己決定の選択プロセスの遂行の特徴() - 観点の重みづけに基づく選択行為に焦点をあてて -
3. 学会等名 日本特殊教育学会第56回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 近藤拓弥・今枝史雄・竹井卓也・菅野敦
2. 発表標題 成人期知的障害者の一般就労へ向けた支援における就労率と支援者の意識との関連 - 就労移行支援事業所への調査を通して -
3. 学会等名 日本特殊教育学会第56回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 辻村洋平・大沼健司・今枝史雄・菅野敦
2. 発表標題 知的障害者の自己決定の選択行為形成に向けた学習支援「居住先の選択」を課題とした実践を通して
3. 学会等名 日本特殊教育学会第56回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 城田和晃・松本咲子・今枝史雄・菅野敦
2. 発表標題 教科別の指導を通じた知的障害者の問題解決能力の形成に向けた学習支援に関する研究() - 教科・理科の指導を基に -
3. 学会等名 日本特殊教育学会第56回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 川西邦子・吉澤洋人・今枝史雄・菅野敦
2. 発表標題 教科別の指導を通じた知的障害者の問題解決能力の形成に向けた学習支援に関する研究() 社会科(地理)の実践を通して
3. 学会等名 日本特殊教育学会第56回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 松本咲子・今枝史雄・菅野敦
2. 発表標題 成人期知的障害者の就労に向けた機能の検討
3. 学会等名 発達障害支援システム学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 近藤 拓弥・今枝 史雄・菅野 敦
2. 発表標題 成人期知的障害者の障害福祉サービスにおける一般就労へ向けた支援内容の分類 先行研究の検討を通して
3. 学会等名 日本発達障害学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 今枝 史雄・菅野 敦
2. 発表標題 成人期知的障害者の選択行為に関わる問題理解プロセス遂行の特徴() 「要素の抽出・整理」プロセスに焦点をあてて
3. 学会等名 日本発達障害学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 本光 侑・今枝 史雄・佐藤 麗奈・菅野 敦
2. 発表標題 重度知的障害者の生活に関わる支援課題に関する研究 生活介護事業所への調査を通して
3. 学会等名 日本発達障害学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 今枝 史雄・城田 和晃・小笠原 拓・原 智彦・菅野 敦
2. 発表標題 知的障害者の自己決定の選択行為形成に向けた学習支援 生涯学習機会での実践を通して
3. 学会等名 日本特殊教育学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 城田 和晃・菅野 敦・今枝 史雄・吉澤 洋人・井澤 信三
2. 発表標題 知的障害者の自己決定に関わる問題解決能力の形成に向けた学習支援 生涯学習機会での実践を通して
3. 学会等名 日本特殊教育学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 城田 和晃・今枝 史雄・菅野 敦
2. 発表標題 知的障害者の自己決定に関わる問題理解プロセス遂行の特徴(1) 科学実験を通じた実践を通して
3. 学会等名 日本特殊教育学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 川西 邦子・吉澤 洋人・今枝 史雄・菅野 敦
2. 発表標題 知的障害者の自己決定に関わる問題理解プロセス遂行の特徴(2) 比較の観点を抽出する手続きに焦点をあてて
3. 学会等名 日本特殊教育学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 深井 敏行・加藤 宏昭・小笠原 拓・今枝 史雄・菅野 敦
2. 発表標題 知的障害者の自己決定における選択行為形成に向けた学習支援 選択行為の振り返りに焦点をあてて
3. 学会等名 日本特殊教育学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 今枝 史雄・小笠原 拓・竹井 卓也・菅野 敦
2. 発表標題 知的障害者の自己決定の選択プロセスの遂行の特徴 未知課題を題材とした実践を通して
3. 学会等名 日本特殊教育学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 近藤 拓弥・今枝 史雄・竹井 卓也・烏雲 畢力格・菅野 敦
2. 発表標題 成人期知的障害者の障害福祉サービスにおける一般就労へ向けた支援課題に関する研究 全国の就労移行支援事業所への調査を通して
3. 学会等名 日本特殊教育学会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計1件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----